准教授　**松田　陽**　　MATSUDA,　Akira

1.　略歴

1997 年 3 月	東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業
2002 年 11 月	ロンドン大学 UCL 考古学研究所修士課程修了　学位取得　修士（文化遺産研究）
2003 年 3 月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了　学位取得　修士（文化経営学）
2004 年 5 月	国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年 7 月）
2005 年 6 月	国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年 8 月）
2009 年 10 月	ロンドン大学 UCL 考古学研究所博士課程修了　学位取得　博士（パブリックアーケオロジー）
2010 年 9 月	ロンドン大学 UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer）
2011 年 9 月	セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate）
2011 年 9 月	イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer）
2014 年 8 月	イーストアングリア大学（University of East Anglia）芸術・メディア・アメリカ研究学科（School of Art, Media and American Studies）准教授（Lecturer）（組織再編）
2015 年 1 月	イーストアングリア大学高等教育実践準修士課程修了　学位取得　準修士（高等教育実践）
2015 年 10 月	東京大学大学院人文社会系研究科　准教授

2.　主な研究活動

a　専門分野

文化資源学、文化遺産研究、パブリックアーケオロジー、博物館研究

b　研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館研究、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちで関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジーという領域に強い関心をもってきた。現在は、古墳と地域住民の関係史、そして自然災害に対する社会の記憶というテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっている。

c　概要と自己評価

2018～2019 年度は主に、（1）日本の文化財政策、（2）パブリックアーケオロジーの理論構築、（3）博物館研究の理論構築、（4）東京大学本郷キャンパスという文化資源、（5）上野公園という文化資源、という 5 つのテーマに絞って研究を遂行した。

（1）「日本の文化財政策」については、国ならびに地方公共団体の文化財政策に委員として関わりながら、関連資料や情報を渉猟・精査した。その成果は「保存と活用の二元論を超えて―文化財の価値の体系を考える」と「「文化財の活用」の曖昧さと柔軟さ」の論考として出版した。

（2）「パブリックアーケオロジーの理論構築」については、これまで蓄積してきた知見を整理し、「A Consideration of Public Archaeology Theories」と「考古学と市民をつなぐ地域の記憶」の論考にまとめた。

（3）「博物館研究の理論構築」に関しては、ICOM（国際博物館会議）における博物館定義の改正が博物館研究（museum studies）における世界的な関心事となっていたことに着目し、「ICOM 博物館定義の再考」の論考を記した。また、寺社における物品の収集行為を日本における博物館の源流の一つと捉えるべきだという趣旨をまとめた「不思議なモノの収蔵地としての寺社」を記した。

（4）「東京大学本郷キャンパスという文化資源」については、長期的な研究を念頭に置きながら資料の蓄積を継続した。その成果の一部は、2019 年 3 月に開催された研究会「学術資産としての東京大学」において述べ、同研究会の報告書にも記した。本テーマについては、「東京大学の歴史資産―埋蔵文化財と文化資源」の授業を通しても情報発信を行った。

（5）の「上野公園という文化資源」に関しては、2015 年度から資料とデータを集積してきたが、2018～2019 年度はとりわけ希少性の高い歴史資料を入手することができた。そのこともあって、本テーマの研究成果は公開できる段階に入りつつある。

d　主要業績

⑴　**論文・論考**

松田陽、「「文化財の活用」の曖昧さと柔軟さ」、『文化財の活用とは何か』、六一書房（國學院大學研究開発推進機構学術資料センター編）、115-125 頁、2020

松田陽、「不思議なモノの収蔵地としての寺社」、『この世のキワ ＜自然＞の内と外』、勉誠出版（山中由里子・山田仁史編）、280-291 頁、2019

Matsuda, A、「A Consideration of Public Archaeology Theories」、『Public Archaeology: Theoretical Approaches and Current Practices, London: British Institute at Ankara』、13-19 頁、2019

松田陽、「保存と活用の二元論を超えて―文化財の価値の体系を考える」、『文化政策の展望（文化政策の現在 3）』、25-49 頁、2018

⑵　**その他の論考**

松田陽、「ICOM 博物館定義の再考」、『別冊博物館研 ICOM 京都大会 2019 特集』、22-26 頁、2020

松田陽、「考古学と文化財」、『季刊考古学』第 150 号、34-37 頁、2020

松田陽、「パブリックアーケオロジーと公共性」、『資料と公共性：2019 年度研究成果年次報告書』、九州大学大学院人文科学研究院、30-39 頁、2020

松田陽、「コメント」、『企画研究「学術資産としての東京大学」講演録 2：第 4 回「古くて新しい学術資産―東京大学の埋蔵文化財―』、東京大学ヒューマニティーズセンター、22-32 頁、2019

松田陽、「考古学と市民をつなぐ地域の記憶」、『七隈史学』第 21 号、3-14 頁、2019

3.　主な社会活動

⑴　**行政**

文化庁、文化審議会委員（分属は 2018 年度：文化政策部会、世界文化遺産部会、無形文化遺産部会、2019 年度：文化政策部会、世界文化遺産部会、無形文化遺産部会）、2017.4～

文部科学省、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会調査委員、2016.4～

文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会委員、2017.4～

日本学術会議（分属は「博物館・美術館等の組織運営に関する分科会」と「文化財の保護と活用に関する分科会」）、連携会員、2017.10～

川崎市、橘樹官衙遺跡群調査整備委員会 委員、2016.4～

市川市、市川市博物館協議会 委員、2017.7～

富岡市、富岡製糸場インタープリテーション検討委員会 委員、2019.4～

鹿児島市、鹿児島市火山防災アドバイザリー委員、2019.6～

鹿児島市、鹿児島市火山防災トップシティ構想検討委員会、2018.4～2019.3

⑵　**学会**

文化資源学会、事務局長、2018.7～

学術雑誌『文化資源学会』編集委員

学術雑誌『Antiquity』編集諮問委員

学術雑誌『Public Archaeology』編集諮問委員

学術雑誌『World Art』諮問委員